

ボランティアって何だろう？

この夏、ボランティアに参加したという方、いかがでしたか？ まだ経験はないけれど興味がある、あるいは自分には向かないな、と思っている方、「ボランティア」に対してどんなイメージを持っていますか。この特集では、ボランティアに携わっている学生へのインタビューから、さまざまなボランティアへの思いやかたちを探ります。皆さんは「ボランティア」って何だと思えますか？

地域情報サークル(RIC) 「いたまぐ! めるまが@いたくら」

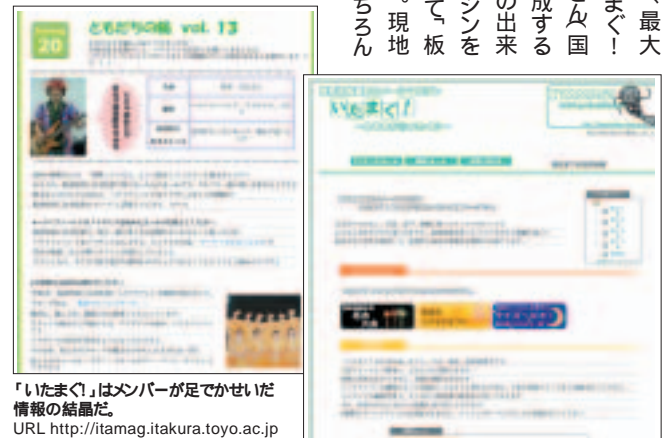
編集長 関根真奈美さん



「日頃何気なく見ている、地域の中にある生活や出来事などにスポットをあてて、それらをマルチメディアに包んで配信する」をコンセプトに、板倉町を中心とした半径およそ30km圏に位置する市町村の住民・自治体の地域情報交流を目的としたメールマガジンを発行する。現在、約500名が登録。発行は1ヶ月半ごと。

ボランティアという言葉が一般的でない、ずっと昔から地域の営みは脈々と人々の善意によって支えられてきた。

板倉キャンパスで学んでいるこの意味を、最大限享受していると思います、と言いつける、いたまぐ! めるまが@いたくら。編集長の関根真奈美さん。国際地域学科3年。彼女を中心に11名で構成する地域情報サークルRICの活動は、地域の出来事や、そこに住む人々取材し、メールマガジンを発行するというもの。町役場の監修を受けて、板倉町「名で発行し、自治体広報の一端を担う。現地にアウトク交通費や取材に関わる作業はもちろん無償。時には取材目的だったものが、イベントそのもの手伝いになることも少なくない。「サークル」といって、「仕事」としての義務感があり、締切り前は苦しい。授業と天秤にかけてメルマガをやることもあれば、笑。でも読んでくれる方の存在が大きなやりがいです。参加の動機は「自分のため」だ。たというメンバーが多い。自治体のインターンシップという意味合いで参加する人や、情報スキルを磨いて、就活の武器にしたいとい



「いたまぐ!」はメンバーが足でかせいた情報の結晶だ。 URL <http://itamag.itakura.toyo.ac.jp>

いつ人も、でも、いつしか板倉のために何ができるだろうという思いで夢中になってゆくんです。取材を始めてからは、記事ネタを探して自転車で町内を回りながら、意外な発見に出会う喜びなど、生活への視点が変化した。さらに、人と人がつながって初めてまちが作られ、私たちの暮らしがあることを実感した。地域を大切に思う生き方を学んだ」と感慨深い。関根さんは、まちに関わる行事は、そこに暮らす人々が日々の営みとして自然に行われてきたものだと言った。先日、地域の消火活動訓練の際に、法被(はっぴ)「青年団」の文字を背負った初老の男性が言った。「最近若者の力が全然集まらなくて。私はまだこんな着ててねえ。思えば、地域の防災活動、交通安全運動、祭事の運営などはみな人々の善意によって支えられてきたことを思い知る。それらが未来に受け継がれていくために、私たちが生活者としてできることは何だろうか。

NPOによる「信州子ども山賊キャンプ」に参加 戸邊敦善さん



学生生活関係の掲示板や学生向けの情報誌などをじっくり見ると、「ボランティア」の文字があちこちに踊る。学生なら時間が十分持てるという理由や、多様な人々と接する経験が、将来を考えるための大きなヒントになる。という願いも込められている。ボランティアという言葉そのものに負ってしまおう人は少なくないが、柔軟な取り組みをしているこちらの好例が、そのイメージを二変させるかもしれない。

楽しいこと、好きなことを「ボランティア」で見つける。より楽しみ、広い経験を積むための方法として。

この夏、NPO法人グリーンウッド自然体験教育センターが主催する小・中学生を対象とした生活体験プログラム「信州子ども山賊キャンプ」に参加したのが戸邊敦善さん(教育学科3年)。4泊5日、沢登りや川下りなどの遊びを中心に、相談員として寝食をとめた。純粋に自然が好き。そして子どもが好き。夏には最高のイベントだなあと思いついて、と参加理由は明快だ。

「こちらのボランティアが指導者でもリーダーでもなく、相談員」と言われるゆえは、子どもたちと同じ目線で話をし、一緒に遊び考え、悩みながらひとつのキャンプを創り上げる存在、というその役割にある。「山賊会議」という話し合いで子どもたち自身が生活のルールを作り、その日行う内容を決める。火おこしから飯づくりまで全てを子どもたちの手で行うのがこのキャンプの特徴。子どもたち自身によるキャンプの成功を見守りながら、安全を管理し、困ったときに手助けする。特別な何かを教えるというよりも、全力で取り組み、心から楽しむ自分の姿を見せることが役割のすべてと感じた。という。気づかないところでヒントを与えるなど、戸邊さんが将来の進路として目指す教職には欠かせない。子どもと接する際に大切なものの見方を学んできた。アウトドア好きの戸邊さん、実は同じくこの夏、泊7日、八ヶ岳にある保養施設職員ボランティアも経験した。こちらは必要経費に報酬が出るタイプのものだったが、最終目的がお金にならな



後方中央に写るのが戸邊さん。たくさん思い出のナップは子どもも大人もみな笑顔だ。

2つの体験を通じ、無償がゆえに、有償のもの以上に体験そのものを価値にしようとする。それがボランティアの魅力」と振り返る。自分が好きなことをそのまま、どこかが、ボランティア」として要請するものにフィットさせる。それは気負いなく楽しみながら、自分を磨くことの「サ」も言えよう。

「必要ない」と「の」のために、当たり前に向き合っただけ。音が聞こえて、文字が書ける学生なら、誰でもいいだけ。



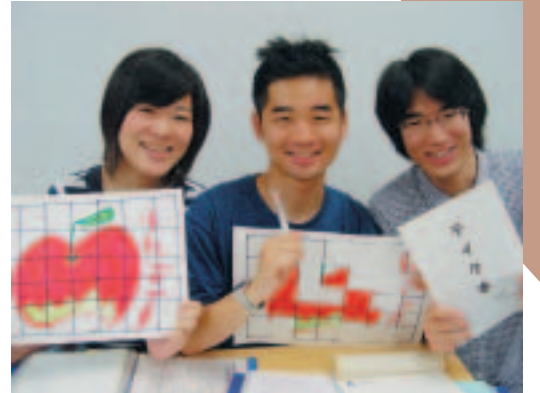
「ノートテイク」に関心を持った方、まずは問い合わせてください。学生生活課 03-3945-7263 または窓口へ。

片岡小百合さん(社会学科4年)は入学後3年間の間、授業のためにクラスメイトの近野大輔さん(同)を視覚の端に捉えていた。聴覚障害を持つ学生の隣に座り、必死にノートを取る姿。それは彼自身の履修科目でもあり、自分の授業として聴講しながら人のためにノートを取ることの大変さが、誰にでも伝わる光景だった。「福祉を学んでいるクラスなのに、誰もが他人として眺めていた。私も「手伝っよ」という言葉が3年間も出なかった」と恥じる。しかし、当の近野さんは片岡さんの勇気を温かく受け止め、あの時は嬉しかったなあと静かに語る。聴覚障害学生へのサポートをあくまで自発的な善意に頼るしかない現状。彼らの思いが大学側の一人として痛く、今回、ボランティアとは何かを最も深く問われることになった取材でもある。

大学には現在、ノートテイクを必要とする学生が9名いる。1授業(1個人)に対して2人でサポートするのが望ましいとされ、もちろん本来は自分の授業時間外に行うべきものだ。さらに、的確なノートを取るためには、ある程度その専門用語に馴染みのある学生が相応しい。各々の学生の履修科目を動員すると、登録する学生全てが実働しても、十分な人数とは言えない。卒業が近づくと近野さんは焦燥感を抱く。彼らがノートテイクというボランティアに向き合う理由は、たひとつ、誰にも等しく学びを保障するために、それが、必要なことだと思っただけ。

今春入会した河根大貴朗さん(教育学科1年)はテイクのある授業を心待ちにする。誰かのために真剣になるこの時間をいとおしく思っただけだ。自主的に取り組んでいるからこそ湧き出る気持ちだと思っただけだ。必要性がボランティアに委ねられているというジレンマは、たまたまの自分の右手が、誰かのために役立つという喜びを、たくさんの人々と共有できたとき解けていくのかも知れない。ここで初めてノートテイクを知った方が一人でも多く関心を寄せてくれることを願う。

ノートテイクサークル 近野大輔さん(代表) 片岡小百合さん 河根大貴朗さん



同じ講義を聴いて耳の聞こえる人にとっての情報量が完全なひとつのりんご(写真左)とすると、聴覚障害者にとっての情報量は写真中央のりんご程度なのだそう。

た5名で運営するサークルでは、テイクとしての活動と同時に講座の開講や初心者にも分かりやすく解説したオリジナルのガイドブック「テイク本」の作成など、必要性を広く訴える。聴覚障害学生のために講義の内容を筆記し、視覚からの情報としてサポートするのがノートテイク。現代の近野さんが、同じ教室にいても聞けず、聴覚に障害を持っているために講義内容が分からない学生がいることに気づいたのを機に独力で学び、サークル化して大学に働きかけた。現在、学生部が窓口となり、個人的にノートテイクとして登録する学生は約50名。た

明治神宮青少年の会で会長を務める

ボランティアサークル「うちだつと」学生代表 鈴木絵梨さん



鈴木さんのボランティアスタッフとしてのキャリアは実に中1の頃から。日曜日にはボランティアに行くのがいわばライフワークになっている。「楽しい」「かいらしいが、将来のため」、そして歴史あるボランティアを守る立場へ。さらに、大学で同じ目標を持った友人たちと出会い、生まれたばかりの学部でボランティアの種を蒔いた。ボランティアが広がり、根を張っていく姿が「うちだつと」である。

日本の伝統行事を子どもたちに伝えるため、季節を通じたさまざまな文化催事を行う明治神宮青少年の会「いぶき」。明治神宮(東京都渋谷区)内に拠点を置き、明治神宮児童文化会と子ども会OBで構成する、60余年の長い歴史を持つ会だ。鈴木絵梨さん(生活支援学科2年)は小学生の頃からこの文化催事(子ども会)に参加。そのままOBとして「いぶき」と関わり続け、現在

ライフワークとして染み付いたボランティア。同じ「目標」を抱く仲間について、ネットワークを広げてゆく。



夏のキャンプの1コマ。子どもたちはそうめん流しにもう夢中!

在、その会長として企画・運営に携わる。今年の七夕のイベントには500名もの親子が殺到したそう。毎回大人気のイベントを明治神宮職員とともに30〜40名のボランティアスタッフで支える。鈴木さんは保育士として働く母の姿を見て育ち、その生き生きとした働きさまに憧れてきた。幼い頃から「子どもに関わる仕事をしたい」という夢は揺らいだことがない。最初は「子どもが好きなことからいぶき」を続けた。今は「将来のために」という意識が強くなったかな、と思っている。「子どもの反応を見て、何が大事か考えるようになった。付き添いの保護者とも積極的に会話をもち、親との関わり方も学びたい」。ボランティアをする中で、将来のトレーニングを始めていくのだ。

しかし、話を聞いていくと、彼女としてのボランティアはいまや自分のためだけではないと分かる。「いぶき」の中心は大学生だが、子ども会を卒業したばかりの中学生、テストや部活動でなかなか時間が取れない高校、生もスタッフメンバー。条件の違う彼らを支えるには困難も多い。「歴史ある会を次の代に守り繋いでいかなければ」と感じています。中学生にもマイクを持たせ人前で活躍の場を与える。「キャンプ」を取り入れ、ボランティアの間には上下関係を生じさせない。いずれも鈴木さんが提案したもので、中高生にボランティアを楽しみ、感じさせる工夫を凝らす。大学生になって一番嬉しいのは、同じ目標に向かって頑張れる仲間がたくさんいること、という。自身のボランティア経験を話す、保育や介護に関心のある20名の仲間が集まった。そして学内にボランティアサークルを立ち上げ、新たに障害者施設へのボランティアにも参加した。「みんなで経験を積んで、将来に向かっていく感じがいい」。ボランティアをひとりのものにし、清々しさがある。



「いぶき」のメンバーと

NPO法人「NICE」で小学校の国際交流理解プログラムを運営

久保田尚子さん

大学生生活最後の夏。久保田尚子さんは国際地域学科4年(は3週間をバングラデシュで過ごした)。

最初の1週間は卒論のテーマである、現地の地下水に溶む砒素調査のため。指導教員の北脇秀敏教授とともに、現地でヒアリングを行った。バングラデシュでは飲料になる井戸水に砒素が含まれているが、住民は適切な処理をせず、中毒になることも少なくない。ハイテク機器を駆使した検査結果を示しても、その重大さをなかなか認知してもらえない。砒素による身近なものの変化を見せて、啓発

活動を行うのもひとつの目的だ。このテーマを卒論としたのは、大学2年の秋、先輩を通じて出合った国際ボランティアに拠る所が大きい。近年、国内の多くの地域で多国籍の人々との共生がすすむ中、一部の小学校では総合学習の時間を活用して、国際交流理解の授業を設けている。その授業を委託されたNPOのメンバーの1人が久保田さん。年4、5回は国内の小学校で、長期休暇中には1週間程度、姉妹校があるバングラデシュに飛び、それぞれ授業を行う。今年もバングラデシュの後半2週間はこのボランティアに参加した。どちらの国でも子どもたちは食やスポーツ、衣装などを通



ボランティアのフィールドを海外に求めて。迎えてくれる人々の笑顔に「偽善」との思いはもうない。

久保田さんはNPO法人「NICE」(日本国際ワークキャンプセンター)のメンバー。国内外を問わず、多彩なボランティア活動を展開するこのNPOで、小学校の国際交流理解プログラムに参加する。日本と海外、それぞれでボランティアを行ってきた2年間、ボランティア活動から広がった興味を、学びの集大成として結実させていくつもりだ。

じた異文化体験に目を輝かせる。「中学生の頃、海外青年協力隊の話を知って心が大きく揺さぶられた。大学入学後は具体的なアクションを起こしたくて、大学が「コーディネートする海外ワークキャンプ」に数度参加したほか、継続してひとつのことに関わることのできるNPOに惹かれました。組織の中核になりつつある今、厳しいスケジュールを求められることも多い。しかし、積み上げたものの大きさを思うと決して投げ出すことはできない、と思っている。国際協力が強い関心がある彼女、意外にもある時まで、「ボランティア」という言葉の響きを、「偽善ばかりでイヤ」と感じていたそう。やっつけていることは



砒素をろ過することができるピッチャーフィルター

すこく楽しいのに、それをボランティアとは言いたくなくて……。言葉が持つイメージが、自分の思いにそぐわなかったのだ。でも、ふとそんなこだわりが解けた。与えるものより確実に得るものが多い。笑顔で待っていてくれて嬉しい。それをボランティアと呼んでいいんじゃないかって。熱心な姿勢に何度も進学を誘われたが、「一般企業への就職を選んだ。社会人としてどのように関わっていくかを考えてみたい」と思ったからだ。卒業まであと半年。ボランティアとこれまでの関心の全てを、卒論にぶつけてゆく。



2005年夏、入村許可が下りたばかりの震災の爪跡を残す山古志村に学生と教職員からなる「東洋大学山古志村ボランティア」が、団体としては初めて現地に入った。ボランティアセンターのアドバイザーを受けながら、それぞれがボランティアとして何ができるのか模索しながらのスタートだった。上田智哉さん(国際経済学科2年)は、学内の掲示でこのボランティアを知った。テレビや新聞で見たあの手古志に行こう。すぐに申込み、約1ヶ月、全8クールで構成されていたボランティアの第陣となった。作業内容は、損壊家屋からの家財運び出しや、公共施設の掃除、ゴミ分別など。しかし、まだ危険性があるため、作業は天候により大きく左右される上、何よりも住民の意向を尊重しなければなら



「母校のみんなの気持ちに嬉しい」。長島さん(後列中央)はいつもボランティアを気にかけてくれる

のではなかった。被災した人々の気持ちを考えながら関わろう、どう次のクールに繋げていくのか。その難しさを知りました。

この夏、上田さんら山古志でのボランティア経験者を中心に、4キャンパスにまたがるボランティア組織が立ち上がった。山古志の経験を基に、次の歩を踏み出して大学にボランティアを根付かせてゆく。それがこれからの、新しいチャレンジだ。

1年目は用意されたボランティアだった、と振り返る。「食事にお風呂、宿泊施設、全て大学によって用意され、現地の人々の多大なるバックアップがあった。ボランティアといふ名の僕らを、その倍近くの人々が支えてくれていたんです」。2年目はそれよりも少しだけステップを進めることができた気がしている。食事は自ら現地調達。村民と同じ仮設住宅に泊まり、スケジュールも自分たちで考えた。現地の人々が心もとなない学生を迎え入れてくれることについて、上田さんは、被災していない人が被



積み上げられた家財道具。まだ復興は終わっていない

東洋大学「山古志村ボランティア」に2年連続参加

学生ボランティアセンター「オレンG」代表 上田智哉さん

2004年10月末、新潟県中越地震で大きな打撃を受けた山古志村(現長岡市)。当初、全棟避難勧告により住民が足を踏み入れることすらできなくなった状況に加え、震災時の村長・長島忠美氏(現・衆議院議員)の村を思う奔走がりと人の心を熱くさせる温かい人柄で、多くの人々の記憶に鮮明に残ったのではないだろうか。長島さんが本学の卒業生だったことなどから、震災を機に山古志村と東洋大学は深く結ばれることになった。

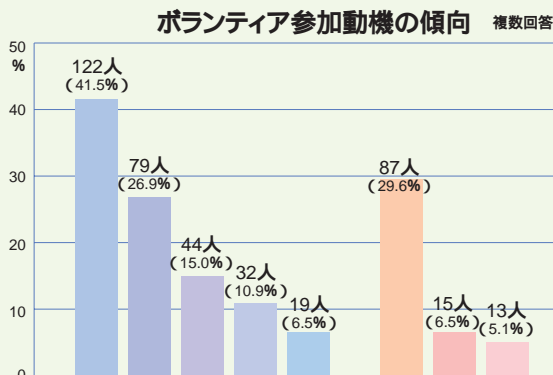
山古志村とつながる。仲間とつながる。災害から生まれた貴重な体験を、大学の新しいボランティアのスタートに。

ボランティア

とは何か？

この特集で紹介したケースのほかにも、さまざまなかたちでボランティアに携わっている多くの学生がいるだろう。単発的・イベント化した取り組みもあれば、何十年とわたるライフワーク的な関わりもあり、一様には語れないが、いずれにしても学生の参加動機は何なのだろうか。ここに興味深い調査結果がある。

学生のボランティア参加動機は変化している？



「自分発」の関心
 今までは違う生活がしたかった
 生きがいになるものを探したかった
 何か楽しいことをしたかった
 暇を持て余していたから

社会的関心
 社会への恩返しとして
 活動に対して強い経験があったから
 地域社会を知りたかった

【調査対象及び方法】

対象は、社会学部社会福祉学科の1～3年生計424名。授業を通じて質問紙を配票・記入、その場で回収した。有効回収率は326名(76.8%)。この調査の実施、分析、および上記の表の作成にあたっては高木真之さん(大学院福祉社会デザイン研究科社会福祉学専攻博士後期課程1年、大妻女子大学実習講師)にご協力をいただいた。

右記の表は、ボランティアに参加したことのある学生294名(90.2%)の参加動機に着目したものである。因子分析という統計的手法を用いて参加動機を分類すると、2つの思考グループに分けられることが確認された。一つは「自分発」の関心から、自身の人格形成や成長、興味を動機とするグループ。自分自身を「創造」していく過程としてボランティアに参加したものと捉えられることができる。もう一方は、社会的関心をき

かけに参加に至るグループで、伝統的に言われている「奉仕や恩返し」といったものが参加動機になっていると捉えることができる。さらに人数を比べると、「自分発」の関心を参加動機にした学生が社会的関心を参加動機にした学生よりも多い。このような「自分発」の動機による参加は近年増加傾向にあると言われており、本学においてもボランティアに対する意識の変化の傾向が見られると考えられる。

「ボランティア」といつと

何か偉いことのように感じる人は少なくないはず。善意・正義・使命。社会のために、無償で労働を捧げる。そんなイメージがどこかにあるからだ。ところが、先の調査結果を見ると、ボランティアへの参加動機が、「自分発」にあることの比重が高く、古典的なイメージとは異なることが分かる。回答した側もこの結果に意外性を感じていないだろうか。

アメリカで10年、ボランティアに関するNPOに携わり、諸外国のボランティアに詳しい須田木綿子社会学部教授は、「ボランティアを『社会的奉仕』と訳す日本の慣習は世界的にみても例外的」と指摘する。「ボランティアとは、volunteer=ボランティアに活動する人のこと。自身の内側から自然にわきおこる衝動に基づいて活動すること。それに社会的・公共的要素が伴ったものがボランティア活動。お腹がすいたから食べる、頭にきたから怒るといった行動と根は同じ。だから欧米流のボランティア理解では、自分がしたいからする」という部分に重点がおかれ、必ずしも

人生の一局面を純粋なかたちで体験できるのがボランティア。「やってみようと思う自分」と向き合ってみよう。

正義や奉仕には結び付けない。人助けも、自分がしたいから助けるだけ。さっぱりしています」と解説する。社会が多様化して、何が正義なのか、何が社会のためになるのかが見えにくくなっている今、日本のボランティアの間にも、「社会のために」から「自分発」の動機で参加する人々が年代に関わらず増えているそうだ。

「理由は世界的に進行するいわゆるポストモダンの影響などとさまざまに言われ、未だ明らかではない。しかし、自分の欲求に忠実な動機ゆえに発想が深く、いい働きをするボランティアが多いとの報告もある」と須田教授。こうした新しいタイプのボランティアを取り込んでいくことが相互扶助の点から、いま大変注目されているのだという。

加えて須田教授は、ボランティアが誠実に活動に取り組まなければならぬことはもちろんだが、成果に固執することはないのではないか、とアドバイスする。確実な成果が必要なら事業としてやればよい。経験がなく、情熱だけで突然ボランティアに行っても、現実にはできることは限られている。それでも「日常を共有していない相手と関わり、心を寄せることに意味がある。自己の理由で参加したことが、社会のためにこんな風に意味がある」となのかな、と知ることに価値がある」と教授は言う。

もしひとつだけ「ボランティアとは何か」という問いに答えを出すなら、どのようなかたちであれ、それぞれが社会の中で他者と関わりながら生きていくことを実感する、個が公共と結びつかけがえのない瞬間だ、ということがも知れない。